

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科			異文化コミュニケーション	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程・5年		永井 那和 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	異文化コミュニケーション研究科		小山 亘 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会		個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名	
研究課題名	コミュニケーションを基点としたクリエイティビティ研究の理論的・方法的考察				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程・5年		永井 那和		
研究期間	2013 年度				
研究経費	(支出金額) 200 千円 / (採択金額) 200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、コミュニケーションを基点としたクリエイティビティ研究の理論と方法を提示することを目的としている。具体的には、(1)北米心理学の内部で興りつつも、近年、学際的な発展が目覚ましい現代クリエイティビティ研究の枠組のクリエイティビティ観を確認し、その特徴と問題点を明らかにする。次に、(2)(1)で明らかになった問題点、すなわち、コミュニケーション、特にディスコース（言語実践を中心とした相互行為）をからみたクリエイティビティという視点の欠如を補う枠組みとして応用言語学や社会言語学を導入した後、(3)記号論的コミュニケーション観を有する社会記号論系言語人類学の枠組みを援用し、両者を相対化しつつ、接合を試みる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[クリエイティビティ] [コミュニケーション] [言語人類学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の最大の成果は、1950年代以降、北米心理学内部から立ち上がった、クリエイティビティの科学的考究を旨とする学術領域「現代クリエイティビティ研究/クリエイティビティ学 (modern creativity research/creatology)」において、これまでほとんど焦点が当てられてこなかった、コミュニケーションを基点としたクリエイティビティ観と、それに基づく事例分析を提示したことにある。以下、そのような成果に到達するに至った背景と経緯に関する概要を述べる。

上で述べたように、クリエイティビティという(構成)概念の科学的考究に本格的に着手しはじめたのは、20世紀中葉の北米心理学であった。その後、クリエイティビティ研究における主たるパラダイムは認知心理学にとって替わり、そのようなパラダイム・シフトを皮切りに、今日では心理学の枠組みを超える学際的な学術領域へと発展していった。このような歴史的背景を持つ今日の現代クリエイティビティ研究には、3つの主なアプローチの存在が認められる。第一に、個人主義的アプローチ(individualist approach)。本アプローチは、心理学、認知心理学、生物学、脳神経科学的な視座を含むもので、実験室における測定、筆記式の測定法の開発及び実行に基づくクリエイティビティ指標の特定化と計量化といった「脱コンテクスト化された(decontextualized)」手法を特徴とするものである。第二に、社会文化的/コンテクスト主義的アプローチ(sociocultural/contextualist approach)。本アプローチは、社会学、グループ・クリエイティビティ研究、組織論、人類学、歴史学的な視座を含むもので、第一の個人主義的アプローチとは異なり、社会文化歴史的コンテクストをふまえてクリエイティビティに接近するものである。そして、第三に、学際的アプローチ(interdisciplinary approach)。これは、個人主義的アプローチと社会文化的アプローチ両方の手法を組み合わせたものであり、昨今の現代クリエイティビティ研究の主要なパラダイムを形成している。

以上にくわえて、現代クリエイティビティ研究では、クリエイティビティの(1)定義、(2)種類、(3)研究のフォーカスに関する議論も整備されつつある。まず、(1)クリエイティビティの定義に関して、どのアプローチにおいても、程度の差こそあれ、「新奇さ(novelty)」と「適切さ/有用性(appropriateness)」という2つの基本要件をなんらかのかたちで満たすプロダクト、あるいは、それを生み出す人物の特性にまつわる共通認識が認められる。(2)クリエイティビティの種類に関して、たとえば、ある個人が午睡をとる際、近くに枕はないが、手近にある本を何冊か重ねて枕代わりにするとき、通勤通学時、交通機関の遅延などにより、別のルートや交通手段を採るとき、偶然、いつもよりも快適に、しかも早く目的地に着くとき、個人レベルでの「新しさ」や「適切さ」が認められる。このような種類のクリエイティビティを現代クリエイティビティ研究では「リトルC(little C)」クリエイティビティと類別する。一方、ある特定の社会で広くクリエイティヴだと認められる著名な科学者や芸術家のプロダクトや能力は、「ビッグC(big C)」クリエイティビティと同定される。また、社会的、歴史的に大きな影響を持つものではないにせよ、専門家が日々の生業やプロジェクトに従事する際に発揮する類のクリエイティビティは「プロC(pro C)クリエイティビティ」と位置づけられる。そして、ある個人がなんらかの対象を学習していく際に発見する新たな視点や問題に対する解法を修得し実践するというプロセスに認められるクリエイティビティは「ミニC(mini C)」クリエイティビティとしてみなされている。今日のクリエイティビティ研究に上記4種のクリエイティビティが区別されている。(3)研究のフォーカスに関しては、基本的に4Pフレームワーク(4Ps framework)が立てられている。これは、人物(Person)、プロダクト(Product)、プロセス(Process)、環境/外的圧力(Place/Pressure)という主要、4つのフォーカスを表す英単語の頭文字に由来している。近年は、この4Pフレームワークにくわえて、クリエイティヴな人物やプロダクトの多様な影響力(persuasion)や、実践・潜在(performances, potentials)という新たなフォーカスも提案されている。

以上のような特徴を持つ現代クリエイティビティ研究は、上で述べたように、心理学から興り、今日ではますます学際性を帯び、多様な可能性を含み持つ学術領域としてみなすことができる。しかし、それでもなお、いくつかの問題点がみられるのもまた事実である。

その問題点とはすなわち(1)言語やコミュニケーションという視点からのクリエイティビティ理論の欠如、そしてそれに伴う事例研究の不足、そして(2)個人主義的アプローチと社会文化的アプローチの接合方法および、その提示の仕方、以上2点である。本研究は、現代クリエイティビティ研究のパラダイムの研究蓄積、長所をふまつつも、以上2点の問題点を同定し、その問題に取り組んだ点で、現代クリエイティビティ研究への貢献が期待される。まず(1)の問題、すなわち、現代クリエイティビティ研究における、言語やコミュニケーション論的視点の不在について、現代クリエイティビティ研究の外部を見た場合、言語やコミュニケーションという視座からクリエイティビティ接近している領野としては、言語学、特に応用言語学や社会言語学、言語人類学などが挙げられる。以下、これらの学術領域における議論を簡単にまとめる。

研究成果の概要 つづき

言語やコミュニケーション論的視点からのクリエイティビティ論は時系列的に整理すると (1) 「言語とクリエイティビティ」に関する議論、そして、そのような議論への批判的言説として現れた (2) 「ディスコースとクリエイティビティ」に関する議論という流れが看取される。まず、(1) 「言語とクリエイティビティ」に関する議論について、メルクマールとなったのは、Carter (2004) の議論であろう。Carter は、言語とクリエイティビティに関する議論を展開するなかで、現代クリエイティビティ研究のアプローチを概観し、言語や言語使用という観点からの体系的な考察がなされていないと指摘した。これを受けて、学術誌『応用言語学 (Applied Linguistics)』は、2007 年に「日常的コンテキストにおける言語的クリエイティビティ (Linguistic creativity in everyday contexts)」という名の下に特集号をくみ、Carter の議論を発展させた。つぎに (2) 「ディスコースとクリエイティビティ」の議論に関して、この類の議論の先駆けは、学術誌『世界諸英語 (World Englishes)』における「クリエイティビティと世界諸英語 (Creativity and world Englishes)」で為された「言語とクリエイティビティ」論に対する批判的論考であろう。とくに Jones (2010) は、言語とクリエイティビティ論の特徴を概観し、言語と言ってもそれは主にメタファーやユーモアなどといったレトリカルな言語の使用の、マイクロ・コンテキストへの効果の研究に留まっていると批判し、彼が新たに立ち上げた「ディスコースとクリエイティビティ」論とは明確に区別されると主張した。また、Bolton (2010) も、Jones の立論にならい、グローバルな規模で進行する言語変種の多様化 (例：単数形の「英語 (English)」から複数形の「諸英語 (Englishes) 」という現実、そして、それに関する議論をふまえ、「言語とクリエイティビティ」の議論や事例分析で用いられている言語変種が主に英語母語話者の言語変種に偏っている点を指摘した。このような議論が展開された後、Jones (2013) は「ディスコースとクリエイティビティ (Discourse and creativity)」と題された論文集を編み、学術誌『世界諸英語』で萌芽的に展開された自身の議論を、他の賛同者・追従者たちと十全に発展させた。そこでは、文学的、詩的な言語使用におけるクリエイティビティの議論から、認知科学・認知言語学におけるメンタル・スペース理論の応用、クリエイティビティの認知的、社会的プロセスへのフォーカス、マルチモーダル分析、ダイナミカル・システム・アプローチなど、多様な研究アプローチが紹介されている。

このように、言語や言語使用、コミュニケーションを基軸に据えたクリエイティビティ論や研究事例は、現代クリエイティビティ研究の外部で発展してきた。以上のような経緯を持つ「言語とクリエイティビティ」「ディスコースとクリエイティビティ」論はある一定の評価が可能であるが、これらの言説を批判的に吟味した場合、両者に共通する問題が浮かび上がる。「言語とコミュニケーション」「ディスコースとコミュニケーション」論は、それぞれ、多様なアプローチを用いてクリエイティビティに接近しているが、両者は、「コンテキスト化 (contextualization)」を重要な概念として位置づけている。このコンテキスト化という概念は 1960 年代以降、言語人類学者のガンパーズが提唱し、言語人類学の領野において鍛えられてきた概念である。さらに、1970 年代にそのプログラムの展望が示され、1990 年代には精密な理論化を経験した言語人類学的コミュニケーション理論においては、コンテキスト化とは「テキスト化 (textualization)」という作用と表裏一体の関係にある概念として位置づけられている。この事実をふまえるならば、言語、言語使用、コミュニケーション論的視座からクリエイティビティに対し十全に接近するためには、「言語とクリエイティビティ」「ディスコースとクリエイティビティ」論が援用してきた手法ではなく、コンテキスト化の概念がその一部として体系的に組み込まれているコミュニケーション観に支えられたクリエイティビティ論を展開すべきであることは明確である。よって、本研究は、言語人類学的コミュニケーション論におけるクリエイティビティを理論的、そして分析的に考察するものであり、以上の論考をふまえたうえで、今一度、本研究の成果を冒頭で述べたことよりも精確に述べるならば、概略、以下の様になるだろう。第一に、現代クリエイティビティ研究に対して。「言語とクリエイティビティ」「ディスコースとクリエイティビティ」論が指摘したように、今日、学際的アプローチを採用し、その学際性を益々強めている現代クリエイティビティ研究は、言語、言語使用、コミュニケーションという視点からのクリエイティビティへの体系的な接近法を持たない。この点において、本研究は、その問題に正面から取り組むものであり、理論的に、分析的に貢献するという成果がみられる。また、現代クリエイティビティ研究の批判から興った「言語とクリエイティビティ」論、さらにそれを批判的に乗り越えた「ディスコースとクリエイティビティ」論に対しては、コンテキスト化の概念を、テキスト性という概念と密接に関連づけられた、より包括的かつ体系的なコミュニケーション理論を擁する社会記号論系言語人類学の枠組みを導入し、クリエイティビティに接近するための、理論的・分析的視点を提供したという成果が認められる。以上が、本研究の研究成果の概要である。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①なし (投稿を予定している学術雑誌:『異文化コミュニケーション論集』、『ことばと人間』、『社会言語科学』、Journal of Pragmatics, Pragmatics and Society)

②なし

③なし

④永井那和 (2014)「コミュニケーションに根差したクリエイティビティ:集団的作曲行為の談話分析」社会言語科学会第33回大会 (2014年3月16日於神田外語大学)
(投稿を予定している学会: International Pragmatics Association)